

ニュージーランド／ワイカト大学／語学研修（2025年度夏期）

異文化の中で学んだ相互理解の力

サービス創造学部 永井優音

序論

私は九月にニュージーランドで行われた海外短期文化研修に参加した。参加した理由は、語学力を高めること、多文化共生を実際に体感すること、そして海外のサービスを学ぶことであった。将来ホテリエとして世界中のお客様に対応するためには、語学力や異文化理解が必要不可欠であると感じていたからである。

本レポートでは、この研修を通して私が学び得たことを、①コミュニケーション、②地域文化・生活、③自分自身の価値観の三つの観点から分析し、それぞれの学びの要素(小キーワード)を明示する。そのうえで、三つに共通する学びの本質(大キーワード)を導き出し、将来どのように活かすかを述べたい。

1. コミュニケーション（小キーワード：伝える勇気・相手を感じ取る力）

研修初日の授業で、私は現地の学生とペアになり、ディスカッションを行った。24個の質問を一つずつディスカッションしていくのだが、内容は政治や世界遺産など、なかなか聞いたことのない単語が多く出てきた、それについて意見を交わさなければならず、とても難しかった。私は頭の中で英語の文法を何度も組み立てていたが、質問の意味がすぐには理解できず、発言のタイミングを逃してしまった。そのとき、相手の学生は私が困るたびに分かりやすい言葉に言い換えて説明してくれた。そのディスカッションの時、文法は支離滅裂であったが、自分の話したいことが思っていた以上にスラスラ話せるようになった。彼女の誠実な態度と堂々とした話し方に強く感動し、間違えてはいけないという固定概念を打ち破るきっかけとなった。

それまで私は、英語を話すときに文法を間違えたら恥ずかしい、正しく言えなかったらどうしようと考え、積極的に発言できなかった。しかし、彼女の姿を見て気づいたのは、コミュニケーションとは正確に伝えることではなく、伝えようとする意志が何よりも大切だということである。言葉が完璧でなくても相手を理解しようとする姿勢や、諦めずに伝えようとする努力があれば、心は必ず通じる。そのことを体験を通して学んだ、

この体験をきっかけに、私はホストファミリーやワイカト大学の学生にも積極的に話しかけるようになった。帰宅してからは、その日に学んだことや感じたことを拙い英語で伝え、時には伝えたいことが言えなくてもどかしい場面もあった。しかし彼らは笑顔であなたの言いたいことはちゃんと伝わっているよと励ましてくれた。その温かい言葉が私の大きな自信となり、英語を話すことへの抵抗感がなくなった。

また、言葉が通じにくい場面では、相手の表情や声のトーン、沈黙の取り方など、非言語的な要

素を読み取ることが非常に重要だと感じた。特にホストファミリーの孫との交流では、英語を使うと同時に笑顔や仕草で心を通わせる瞬間が多かった。このように、コミュニケーションには、言語を超えた感覚的な理解力が必要だという気づきを得た。

この体験を通して、私は伝える勇気と相手の感じ取る力の両方を身に着けることができた。コミュニケーションとは、単位言葉のやり取りではなく、相手と真摯に向き合う人間的な行為である。今後はこの姿勢を大切に、どんな人とも恐れずに向き合える柔軟な心を育てていきたい。

2. 地域文化・生活(小キーワード：多様性の尊重・共存する力)

ニュージーランドは、先住民マオリの伝統とヨーロッパ系移民文化、そしてアジアをはじめとする多様な民族が共存する多文化社会である。私はこの国を訪れる前から多文化共生の国という印象を持っていたが、実際に生活してみて、その言葉が単なる理念ではなく、人々の日常に自然に根付いていることを肌で感じた。

街を歩くと、さまざまな人種や文化の人々が混ざり合い、互いの違いを受け入れながら穏やかに共存している光景が広がっていた。バスの運転手がマオリ語で挨拶をしたり、大学内で異なる民族の学生が当たり前のように議論したりする姿を見て、多様性とは特別なことではなく、当たり前存在することなのだと感じた。

私のホストファミリーはマオリの家庭だったため、マオリの文化や考え方を間近で学ぶことができた。初めて会ったとき、ホストマザーの顔にタトゥーがあるのを見て驚いたが、それがタ・モコと呼ばれる伝統的な入れ墨であり、家計や人生の歩み、自然への敬意を表す神聖な文化的象徴であることを知った。その意味を理解したとき、私は文化とは見た目には特徴ではなく、人の生き方そのものであると感じた。

滞在中には、国をあげて行われるマオリ語ウィークというイベントもあった。これはマオリ語の使用を促進し、文化の継承を目的としたものである。その期間、街ではKia ora（こんにちは）やMorena（おはよう）といったマオリ語の挨拶が交わされ、学校でもマオリの歴史や言語を学ぶ授業が行われていた。人々が自らの文化を大切に、誇りを持って継承しようとする姿勢に強く心を打たれた。

また、生活面でも日本との価値観の違いを感じた。ホストマザーは朝8時から14時まで、ホストファザーは早朝5時から13時まで働き、午後は家族との時間を大切にしていた。夕食時には家族全員がそろい、会話や笑い声が絶えなかった。日本のように仕事中心の生活とは異なり、仕事よりも家族との繋がりを優先する生き方がそこにはあった。私はこの姿勢に触れ、豊かさとは収入や効率ではなく、人との繋がりの中にあるのではないかと考えるようになった。

ニュージーランドでの生活を通じて、私は多文化社会の本質を少し理解できたように感じる。それは、異なる文化を混ぜることではなく、互いの違いを尊重しながら共に生きることだ。多様性を恐れず、それを社会の力に変える姿勢こそが、共生社会の根底にあるのだと学んだ。

3. 自分自身の価値観(小キーワード：自己表現・他社尊重)

ニュージーランドでの生活は、私にとって自分を見つめ直す鏡のような時間だった。英語力を試す場面よりも、自分の弱さや偏った考え方に気づかされる場面のほうが多かった。たとえば初日の授業では、ディスカッションで意見を求められても言葉が出ず、沈黙してしまった。理解できなかったのではなく、間違えたらどうしようという恐れが先に立ってしまったのだ。そんな私に、現地の学生が完璧よりも、あなたの考えを聞きたいと笑顔で話しかけてくれた。その一言が胸に残り、私は初めて間違えを恐れることこそが、学ぶ機会を奪っていることに気づいた。

また、現地の学生たちは授業中でも教師に対して積極的に質問をし、自分の意見を率直に述べていた。その姿を見て、正解を求める教育に慣れてきた自分の姿勢を見直すきっかけになった。日本では空気を読むことが重視され、意見を控えることが調和とされる場面が多いが、ニュージーランドでは異なる意見こそが新しい視点を生むと捉えられていた。私はその姿勢に強く共感し、今後は自分も他者と意見を交わすことを恐れずに、自分の考えを自分の言葉で表現していきたいと思うようになった。

さらに、ホストファミリーとの生活を通して自己主張と他者尊重の両立ができる関係性を学んだ。彼らは家族間でも、意見が違えば率直に伝え合い、互いの考えを聞く時間を大切にしていた。対立を避けるのではなく、理解し合うために話し合うという姿勢に触れ、私は本当の優しさとは相手の意見を否定しないことだと感じた。それは、相手に迎合する日本的な優しさとは異なる、より主体的で成熟したコミュニケーションの形だった。

この経験を通して私は自分の意見を持つことと、相手を尊重することは対立するものではないと学んだ。むしろ、異なる意見を持つ人と向き合うことでしか、自分の考えは磨かれない。これまで私は間違えないことを重視して生きてきたが、これからは間違えても学び続ける姿勢を大切にしたい。自分を守るために沈黙するのではなく、自分と異なる価値観を受け入れながら、自らの意見を築いていくその過程こそが、真の成長だと確信した。

4, 将来のビジョン(大キーワード: 相互理解の力)

今回の研修を通して私が学び得た大キーワードは、相互理解の力である。言語や文化、価値観の異なる人々と関わる中で、相手を理解しようとする姿勢こそが、人と人をつなぐ原動力であると実感した。相手の背景を尊重し、自分の考えを押しつけずに対話を重ねる。その積み重ねの中にこそ、真のコミュニケーションがあると学んだ。この気づきは、今後の私の人生の軸となる学びである。

語学面では、まず文法や語彙といった基礎力を徹底的に磨きたいと考えている。研修中、自分の言いたいことを伝えきれなかった悔しさを何度も感じたからこそ、正確な知識の大切さを痛感した。同時に、ただ知識を詰め込むだけでなく、伝える力を育てることに重点を置きたい。大学内の iSquare に積極的に通い、英語でのディスカッションやフリートークを重ねることで、英語を学問ではなく自分を表現する手段として使えるようになりたいと考えている。

さらに、語学力が一定の水準に達した段階で、再び海外の語学研修に挑戦し、より実践的な経験を積みたいと考えている。私は入学前から卒業までに TOEIC800 点を取得するという明確な目標を

掲げており、今回の研修を通してその意志がさらに強まった。千葉商科大学の交換留学には TOEIC785 点以上などという条件があることを知り、いつか自分もそのプログラムに挑戦したいという新たな目標が生まれた。ニュージーランドでの伝わらなかった悔しさと伝わった喜びを胸に、着実に力を積み重ねていきたい。

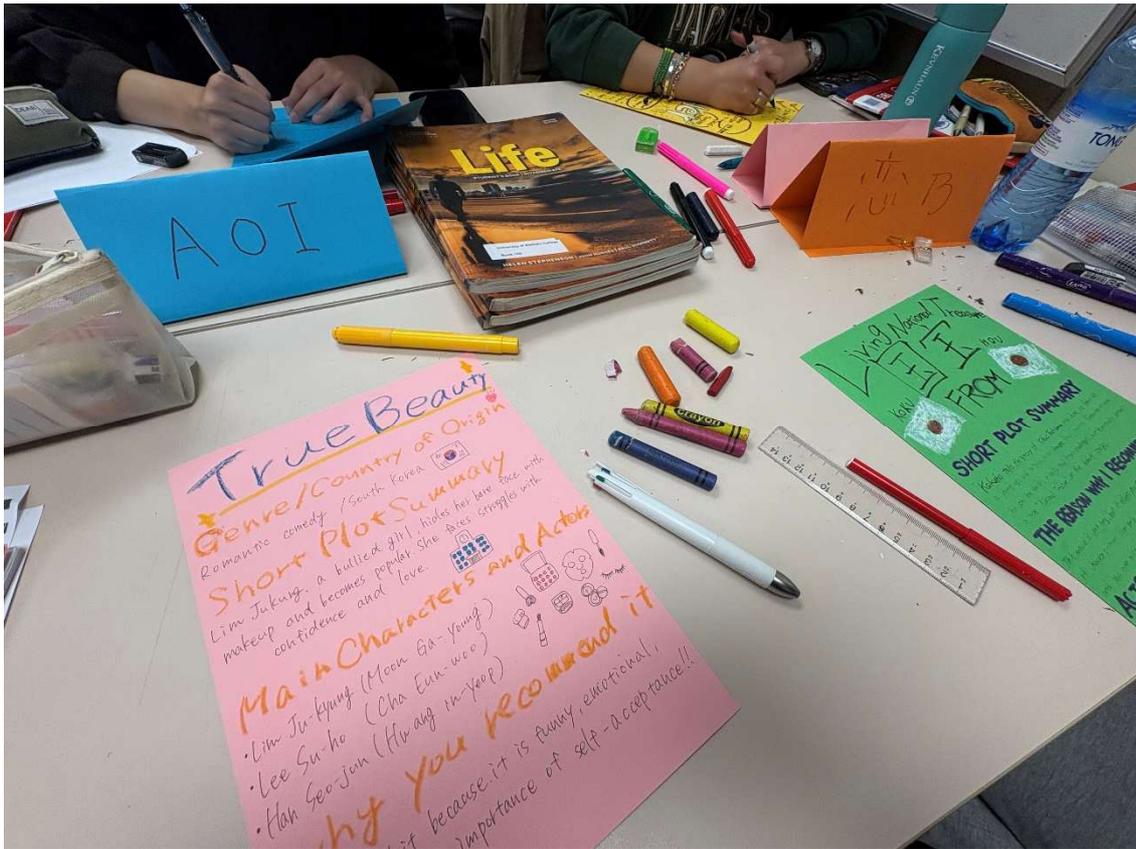
大学での学びではサービス、経営、多文化共生といった分野を中心に、理論と実践の両面から学びを深めていきたい。特に、サービス創造学部では企業との連携プロジェクトや実践型授業が多く用意されており、学んだ知識を実際の現場で試すことができる。この環境を活かして、日本のサービスの強みと海外のホスピタリティ文化を融合させた、新しい形のサービス価値を創造する力を身につけたいと考えている。

将来的には、ホテルエとして国内外のお客様一人ひとりに寄り添い、この人に会えてよかったと思ってもらえるような温かいサービスを提供したい。そのために、語学力や専門知識だけでなく、多様な人々の価値観を受け止める柔軟さと洞察力を養っていくことが不可欠だと感じている。そして最終的には、ホテル全体の運営・経営を担う総支配人として、スタッフが誇りを持って働ける職場をつくり、チーム全体でお客様に最高の体験を届けられる組織を築きたい。

ニュージーランドで学んだ相互理解の力は、私にとって単なる研修の成果ではなく、これからの人生を支える原点である。異なる文化や価値観を持つ人々と心を通わせ、互いに学び合う姿勢を大切にしながら、世界中の人々に温かいサービスを届けられる人へと成長していきたい。



(ホストファミリーにマオリの民俗衣装を体験させてもらった)



(授業中 お気に入りの映画について書く)